

2014年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告

春日 由美
宮内 孝
古賀 隆一
黒川 久美
内田 芳夫

はじめに

南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターでは2010年4月以降、「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」などの活動を行っている(春日ら, 2011; 黒川, 2011; 春日, 2011; 春日ら, 2012; 春日, 2012; 春日ら, 2013; 春日, 2013; 宮内, 2013; 春日ら, 2014; 春日, 2014)。「子育て支援室」は臨床心理士でもある学部教員1名が地域の子どもや子育てに関する心理相談を受ける活動である。「チャレンジ運動教室」は体育が専門の学部教員1名と学生ボランティアによる活動で、運動の苦手な子どもたちと保護者に運動遊びを体験してもらう活動である。「あそびの教室」は美術が専門の学部教員1名と学生ボランティアによる活動で、地域の子どもと保護者を対象にした工作遊びを体験してもらう活動である。これら3つの活動は、子育て支援センター開設当初から毎年継続している活動であり、今年で5年目となり、学部教員の専門性を活かし、一定の地域貢献を果たしてきたと考えられる。また「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」では、学生がボランティアで参加することで、学内で実際に子どもや保護者と触れる機会になり、将来子どもに関わる仕事を目指す学生たちの学びの場にもなっている。本報告では、2014年の「人間発達学部附属子育て支援センター」の活動について報告する。

1. 子育て支援室

子育て支援室では、2013年までと同様に、大学の地域貢献を目的に子どもや子育てに関する相

談業務を行った。相談内容は①子育てについて(子育てに自信がない、イライラしたり不安になる等)、②子ども自身について(不安が強い、学校や園に行きたがらない等)、③親子関係について(子どもが言うことを聞かない、何を考えているか分からない等)とした。子どもの年齢は限定せず、また保護者のみの相談や、教員の相談も受けた。スタッフは人間発達学部教員1名(臨床心理士)である。相談は完全予約制で、1月～3月は毎週月曜日10時～12時、4月～12月は毎週火曜日の13時から17時で行った。受理面接の予約は、都城キャンパスの事務部で電話を受け、その後担当教員が申込みの受付をし、受理面接日を調整するシステムである。また来談中のケースについて、クライアントが在籍する学校に出向いてケース会議に出席した(年2回)。なお、本学部には2011年4月より障害児心理学専門の教員1名が配置され、ケース会議にはその教員も参加した。

毎週、継続中のケースや新規のケースにより、ほとんど予約は埋まっている状況であり、昨年以前より継続のケースを含めた2014年1月～12月の面接回数は延べ104回であった。相談を受けた子どもの年齢は幼児から10代後半まで幅広く、男女差は5:11で女子の方が多かった。2014年1月から12月の相談業務に関する統計資料および今後の課題は別にまとめる(春日, 2015)。

2. チャレンジ運動教室

(1) ねらい

近年の「都市化による遊び場の減少」「少子化による遊び仲間の減少」そしてテレビゲームやコ

ンピュータゲームなどの「子どもの遊びの変化」などにより、子どもが身体を思い切り動かして遊ぶ機会は、減少の一途をたどっている。そのため、「遊ぶ楽しさを味わっていない子ども」「運動に苦手意識をもっている子ども」「動きの発達が未熟な子ども」の増加が問題となっている。

そこで、これらの問題解決の一助として、2010年度より「チャレンジ運動教室」を開催した。この教室は、運動が苦手な子どもを対象とし、その保護者も参加することが条件となっており、その参加者はこの5年間で1000名を超えた。

保護者、子どものそれぞれのねらいは、次のとおりである。

- ・保護者…子どもと一緒に「運動遊び」を楽しみながら、子どもの心身の発育発達の様子を観察したり、それぞれの動きの指導法を身に付けたりする。そして、この教室をきっかけに家庭生活の中で、「運動遊び」を楽しむ時間を積極的に設定して、子どもの心身の発達を促そうとする態度を育てる。
- ・子ども…「運動遊び」の楽しさやできない動きができる楽しさを味わって、外で思い切り遊ぶ意欲と態度を育てる。

(2) 2014年度の教室の概要

1) 参加者：260名

- ・幼児（5.6歳）とその保護者 70組
- ・小学校1.2年生とその保護者 62組

2) 実施回数：15回

- ・前期の部 8回（5/31, 6/7, 6/14, 6/21, 6/28, 7/5, 7/12, 7/26）
- ・後期の部 7回（10/11, 10/18, 11/1, 11/8, 11/29, 12/13, 12/20）

3) 教室の内容

幼児の部は、走る、跳ぶ、投げる、捕る、支える、回る等の基礎的な動きを取り上げた。親子で道具を使って遊んだり、まねっこ遊びなどのゲームをしたりしながら、それぞれの動きの感じを身に付けるようにした。

小学校の部は、3年生時から学習する「かけっこ」「器械運動」「ボールゲーム」などの運動につながる動きを取り上げた。親子でやさしい動きか

ら難しい動きへと挑戦できるようなゲームを多く取り入れて、課題とする動きが身につくようにした。

4) 子ども教育学科学生の参加者：のべ230名

本教室参加を希望する学生が、授業科目「子ども支援地域活動」の一環として、参加した。教室開始1時間前に、子どもへのかかわり方や運動指導のポイント等についての事前指導を行った。教室が始まると、担当するグループのマネジメントやつまずいている子どもへの支援を行わせた。教室終了時には、学生一人一人の反省や学びを話し合う事後指導を行った。学生にとっては、子どもにかかわりながら、子どもの発育発達の違いや、子どもとのコミュニケーションのとり方、そして運動指導法などの多くのことを体験的に学ぶ機会となった。

(3) 今後の課題

保護者が、チャレンジ運動教室終了後も自分の子どもを対象として運動指導が実施できるような「保護者が我が子に行う運動指導プログラム」の開発を行う。

理論と実践を結びつけた学生の学びを充実させるために、授業科目「幼児体育」「体育」とチャレンジ運動教室をどのように関連させるかを検討する。

3. あそびの教室

地域の親子が参加できる活動として、2010年の学部新設年からはじめた本活動は、5回目である。2013年に引き続き「あそびの教室」第5回「飾りの帽子を作ってあそぼう」を企画し、2014年10月26日（土）に開催した。この「あそびの教室」は、単に子どもを遊ばせるだけのイベントではなく、親子で活動に参加してもらうことで、①家に帰ってからも親子で遊ぶヒントになるような遊びの提案、②子どもだけでなく親も一緒に遊ぶことで、あそびによる成長と創造の楽しさや大切さを体験してもらうことを目的とした。また準備から当日まで、教員だけでなく学生も参加することで、学生のボランティア精神と創作学習につながることも目的としている。以下、第5回の取り組みで

ある、動物や昆虫、船や飛行機、樹木や家のダンボールによる遊具のあそびと「かぶり物工作教室」について報告する。

(1) スタッフと準備

(a) スタッフ

人間発達学部の教員4名と学生12名、3年ゼミ生3名が参加した。この活動への学生の参加は授業科目「子ども支援地域活動」の一環でもある。

(b) 準備

準備は6月から10月までの間の内およそ8月、9月の夏季休業を除き3カ月間である。教員と学生で、会場に設置する段ボールと広告の紙で作った船や魚、樹木、子どもの家、動物等（キリン、馬、犬、豚）、昆虫は蟻、カブトムシ等の作品である。本年度は怪獣生誕60周年にあやかって怪獣制作に取り組んだ。工作のテーマとしては犬やキリンといった特徴があって制作し易い工作を中心に、制作の提案を続けてきたが、子どもの心にインパクト、驚き、関心を喚起したいとの思いでもある。当日親やスタッフが見本や子どもが遊べるような作品等を授業の空き時間などに制作した。動く玩具としてキャストを取り付け、遊びの範囲を広げ、昨年に引き続きコンパクトリヤカーを遊具のベースに使った本格的な動く遊具を試みた。また教員が広報（都城市や三股町の広報課に協力戴く）、傷害保険の手配、FAXでの参加者の受付を行った。

(2) 当日の活動

「あそびの教室」前日の2014年10月25日に、教員と学生で体育館内に段ボール遊具の作品を搬入した。当日2014年10月26日（土）は、9時から12時の間（3時間）、体育館を使って実施した。参加者は幼児（5～6歳児を中心に3歳以上の未就学児）と小学生の親子10組、計30名であった。工作の内容は①風船を使った被り物の素材をあらかじめ学生と教員で作ったものを準備して作品のベースに使用する。②ダンボールや厚紙、色紙、広告の紙や古新聞紙を2倍に薄めたボンド（接着剤）を使って飾りの部分を貼っていく張り子の技法である。①②共に教員から説明を行い、学生ボ

ランティアは主にあそびのパートナーとして活動し、教員が親子の工作を手伝った。

(3) アンケート結果と今後の課題

親へ協力をお願いしたアンケート結果では、「楽しかった」「ためになった」「また『あそびの教室』に来たい」は回答者全員が「はい」という意見であり、「家に帰ってから、やってみようと思う」と「子どものことで、これまで気がつかなかった発見があった」に関してはやや消極的の反応が一部みられた。しかし子どもが自由に使えるダンボール遊具での遊びは、参加者には有意義な活動になったと思われる。今後親が子どものことに注目しやすくなるような配慮や工夫をすることを検討する必要があると考えられる。また自由記述項目では、楽しかった、機会を増やして欲しい等の意見があった。また、今後も続けて欲しい、更に創造意欲が増したようだ、家でも作って楽しみたい、等の意見もあった。

今年の取り組みも親子（幼児）を対象にしている。これは初回より一貫している。工作は大人が主体にならないと幼児の参加は難しい。ダンボールと紙を使うのは幼児の遊びで大切な安全をメインに考えているからである。素材の紙から様々なアイデアやイメージを見出すことが工作の意味であり、親が制作をしている姿を幼児が見ながら僅かでもお手伝い参加と遊びに興じる姿をイメージして企画している。工作は本来制作しているその時間が“楽しい遊び”であり安易に結果（作品の出来栄）を求めべきではない。この活動は遊びを主体とした幼児の参加に重きを置くもので、工作は親には頑張っている制作の姿を見せて欲しいと願うものである。そして今後の活動の希望としても幾つか活動の提案もあり今後検討していきたい。今回は、昨年度までの活動内容や進行の方法などの課題に対する問題点を克服する為に、オリエンテーションを行い、子どもの自由画や自由工作の本来あるべき姿を説明し、工作は完成を目的とするのではなく完成に至るプロセスの大切さ、試行錯誤の重要性といった幼児造形教育の理論を解説することから始めた。

今回は「あそびの教室」の5回目であったが、

今後の活動の参考になることが数多くあり、次年度以降も少しずつ改善しながらよりよい活動を作り上げていきたいと考えている。

まとめ

以上、人間発達学部附属子育て支援センターの活動の3本柱である「子育て支援室」、「チャレンジ運動教室」、「あそびの教室」についての2014年の取り組みを報告してきた。3つの取り組みは地域に根ざしたものになってきている。また「チャレンジ運動教室」、「あそびの教室」における学生参加も定着してきたといえ、先輩から後輩への学びと経験の継承もなされるようになってきている。

昨年度課題として掲げたものの一つである「子育てひろば」のトライアルを2014年度内に実施する運びとなった。関心のある学生を募り、集まった10名前後の学生たちと共に、支援センター保育士を軸に2名の学部教員も加わって準備を進めている。「子育てひろば」の愛称も「みなみん」と決まり、チラシ・ポスター作成と配布、公的機関への広報、「みなみん」の設営準備等、学生たちが役割分担をして、主体的に取り組んでいる。3月半ばのトライアルを経て、次年度正式にスタートしたいと考えている。次年度には4つ目の活動として「子育てひろば みなみん」の報告ができればと思う。

今後の課題として4点あげておきたい。

第1に、上述した「子育てひろば みなみん」の取り組みを、月1回であれ、年間を通して、ある程度恒常的なものにしていきたいと考える。「みなみん」の持ち味の一つが学生参加であることをアピールできればと思う。そのためには学生へのていねいなアドバイスやフォローの仕組みを作ることも必要であろう。

第2に、子育て支援センターにおいて、特別な支援を必要とする子どもたちへの取り組みの可能性を特別支援教育の教員の協力も得ながら模索していきたい。

第3に、支援センターの諸活動への学生の参画と、教育・保育実習や大学での授業・ゼミ、あるいは「夢かなⅡ」での表現活動等とを有機的に関連させるしくみづくりを追求していきたい。

第4に、都城市・三股町地域にある4か所の子育て支援センターの自主的な連絡組織である「求10ネットワーク」の要請を受けて、親への子育て講演会の講師を今年度は教員（春日）が引き受けた。また「子育て家庭支援論」（黒川担当）の授業の一環として、子育て支援センターの協力を得て、3か所の支援センターへの学生の「実地研修」を昨年度にひきつづき行うことができた。さらに、近隣の児童館で11月からスタートした、月1回の「子育てカフェ」に教員（黒川）が参加している。こうした取り組みの積み上げと実績によりながら、地域の子育て支援機関・施設との連携のあり方を探っていきたい。

今日子ども・子育てをめぐる問題や地域の実情について、取り組み中でこそ見えてきたものが多々存在する。それらについて支援センターとして論議を深め、今日的諸課題にこたえていけるよう活動の幅を広げ、更に豊かなものにしていきたいと考える。

引用文献

- 春日由美・黒川久美・宮内孝・古賀隆一（2011）2010年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 1, 89-92.
- 春日由美（2011）2009年・2010年南九州大学における子育て支援としての子どもに関する相談業務報告 南九州大学人間発達研究, 1, 93-95.
- 春日由美（2012）2011年南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターにおける子育て支援としての子どもに関する相談業務報告 南九州大学人間発達研究, 2, 220-222.
- 春日由美・黒川久美・宮内孝・古賀隆一・内田芳夫・矢口裕康・若宮邦彦（2012）2011年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 2, 215-219.
- 春日由美・宮内孝・古賀隆一・黒川久美・内田芳夫（2013）2012年度人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 3, 123-126.
- 春日由美（2013）2012年南九州大学人間発達学

- 部附属子育て支援センターにおける子育て支援としての子どもに関する相談業務報告 南九州大学人間発達研究, 3, 119 - 121.
- 黒川久美 (2011) 「わくわくおやこ村」に関する報告 - 地域との連携による子育て支援活動 - 南九州大学人間発達研究, 1, 97 - 100.
- 宮内孝 (2013) 運動が苦手な子どもを対象とした「チャレンジ運動教室」の3年間の活動報告 - 捕球技能を高める指導事例を取り上げて - 南九州大学人間発達研究, 3, 127 - 134.
- 春日由美・宮内孝・古賀隆一・黒川久美・内田芳夫 (2014) 2013年度人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 4, 129 - 133.
- 春日由美 (2014) 2013年南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターにおける子育て支援としての子どもに関する相談業務報告 南九州大学人間発達研究, 4, 134 - 136.
- 春日由美 (2015) 2014年南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターにおける子育て支援としての子どもに関する相談業務報告 南九州大学人間発達研究, 5, 115 - 117.